

## 森の宝物

奄美市立屋仁小学校 三年 中山 俊

きらっ、きらきらっ。

「あれは何の光なのかなあ。あ、また。」

空高くまで伸びたガジュマルの頂上で、何か光っています。くもの間からかすかに、赤と金色がまざった光が見えます。きつと宝物だ。そう思って、僕は家を飛び出しました。

森のガジュマルにつくと、木の上から、

「おおい。僕たちのガジュマルに何か用かい。」

と、声が聞こえました。よく見ると、木のぼりトカゲが緑色の小さな手をふっています。びっくりしながら、僕は小さな声で、

「も、森の宝物を探しにきたんだよ。」

と答えました。すると、木のぼりトカゲが、

「そうかあ。じゃあ僕と一緒に行ってあげるよ。僕はミドリ。よろしくね。」

と言って、小さな手を差し出しました。僕は、その手に人差し指をちよんと乗せて、

「ありがとう。僕はしゅん。よろしく。」  
と、あくしゅをしました。そして、ミドリを右かたに

乗せて、ガジュマルを登り始めました。

しばらく、丸太みたいな気根の上を歩いていると、色とりどりの宝石のような実を見つけました。僕は、む中になって実をとりました。またしばらく登ると、一匹のルリカケスが、

「ねえ。僕たちの大切な実を知らない。」

と、声をかけてきました。もったいない気持ちもあつたけれど、僕は素直に実を返しました。ルリカケスは、うれしそうに一回転して飛んでいきました。

「しゅんは、やさしい心をもっているんだね。」

と、ミドリがぴよんとかたの上ではねました。

その時です。とつぜんバキバキとみきに穴があき、その穴に転がり落ちてしまいました。

「いたたた。ミドリ大丈夫。どこにいるの。」

辺りは真っ暗です。上を見上げると、落ちてきた穴がかすかに光っています。その時、野太く大きい声が穴中にひびきわたりました。

「おい。気安くさわらんじやないぞ。」

なんと、落ちたのは三メートルはある大ハブの上だったのです。大ハブは、大きな口を開けておそつてきました。僕はとぶように上へ上へとにげました。心ぞうが痛いくらいどくどくします。出口に手がかったその時、

「たすけて、しゅん。食べられるよお。」

ミドリの泣きそうな声が聞こえてきました。下を見ると、ハブにまき付かれて、今にも飲まれそうなミドリが見えました。こわくて心ぞうがとまりそうだし、たすかりたいという気持ちでいっぱいになりました。でも、友だちをたすけるために、勇気を出してさげびました。

「やめろお。ミドリをはなせ。」

僕は、穴の出口から思い切って大ハブに向かってジャンプしました。こわくて、こわくて、手がぶるぶるふるえました。どんどん落ちて、みるみる大ハブが近づいてきます。グシャリ。大ハブのせ中に僕の右足のかかとがさりました。すると、

「ぐええっ。ぐぼおおっ。ぐふうっ。」

と、大ハブはひめいをあげて気ぜつしてしまいました。大ハブからたすかったミドリが、

「ありがとう。しゅんは、だれもがこわがる大ハブに立ち向かう勇気をもってるんだね。」

と、僕の顔に飛びついてきました。まだむねがどきどきしていたけれど、どきどきと一緒にうれしさが体中にあふれました。

「よかったね。さあ、あともう少し。ガジユマルの頂上目指して登ろう。」

また二人で、頂上を目指して登り始めました。

「やったあ。頂上だ。すごい景色。」

ついに頂上につきました。森の向こうの海のかなたまで、ぐるりと見回せます。風が体をとおりぬけ、空にとけたような気持ちです。

「しゅん。このかぎを木のみきにさして回してごらん。」

森の宝物がわかるよ。」

ミドリから古い木のかぎをもらい、みきにさして回すと、みきがわれ、あのみしぎな赤と金色の光があふれてきました。そこには直径五十センチメートルほどの光る玉がういていました。中で何かが動いています。近づくと、

「わあ。これ、全部本物なの、ミドリ。」

思わず声が出ました。その中には、人間、動物、昆虫、ありとあらゆる生きものたちの小さな小さな赤ちゃんがかんでいました。何千何万いるかわかりません。

「これが森の宝物さ。森の全ての命がつまっているんだ。この光は、心がきれいな人にしか届かない。そして、ガジユマルを登る時に、やさしさや勇気を忘れなかつた人だけが見ることができなんだよ。」

ミドリの言葉を聞きながら、僕はこの命の玉を守りたいと心から思いました。

「ありがとう、ミドリ。君のおかげで本当の宝物の意

味が分かったよ。」

「これからはしゅんも森の仲間だね。一緒に森の宝物を守っていこう。」

「うん。またときどき見に来るからね。」

二人の顔を赤と金色の光がきらっ、きらきらとてらしていました。

